京都大学	博士（文学）	氏名	廣瀬　勤
論文題目	黒Yajurveda散文におけるSattra儀礼 ――行者たちの1年の共同生活――		

（論文内容の要旨）

本論文は、古代インドのヴェーダ祭式においてサットラ（Sattra）と呼ばれる儀礼を取り上げ、ヴェーダ文献におけるその儀礼に関する最古の記述の読解と考察を通して、最古の段階のサットラの姿を明らかにすることを目指したものである。その最古の記述は、ヴェーダ祭式の実務・執行を司った、アドヴァリュと呼ばれる祭官家系が伝える黒ヤジュルヴェーダ文献に見られる。具体的には、『カータカ・サンヒター』（Kāṭhaka-Saṁhitā、以下KS）の第33巻と第34巻、『タイッティリーヤ・サンヒター』（Taittirīya-Saṁhitā、以下TS）の第7巻に、サットラ章と呼ばれるセクションがある。本論文は基本的にはこの二つの文献のサットラ章を取り上げたが、加えて、これらサットラ章との平行箇所を部分的に持っている『マイトラーヤニーサンヒター』（Maitrāyaṇī Saṁhitā、以下MS）4.8.10、KS 30.5、『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』（Taittirīya-Brāhmaṇa、以下TB）1.2.2–6 についても取り上げている。

第１章である序論では本論文の主題や目的（1.1）を述べた後、サットラの概要（1.2）、研究史（1.3）、原典と研究方法（1.4）についての紹介がある。続いて、本論は大きく４つの章に分けられる。KSのサットラ章の構成（第２章）とTSのサットラ章の構成（第３章）とKSの記述とTSの記述の対応（第４章）と春分祭と夏至祭に関する記述（第５章）である。その後に、第６章として結論が述べられる。さらに、付論として、原文と訳注が置かれる。第２章（「2 KSのSattra章の記述の構成」）では、KSにおけるサットラ章の概観および個別の儀礼に関する記述についてまとめ、その内容から推測されることについて考察を行う。もっとも顕著な特徴として、１年単位の祭式が、１年の開始から終了まで、時系列順に述べられているという点が挙げられる。このことは、シュラウタ・スートラ（ヴェーダ祭式の儀軌書）で記述されるサットラ章から期待される記述の枠組みとは大きく異なっている。第３章（「3 TSのSattra章の記述の構成」）では、TSにおけるサットラ章の概観および個別の儀礼に関する記述についてまとめ、その内容から推測されることについて考察する。TSのサットラ章には、日数の異なる個々のサットラを、数詞＋-rātra-（「夜」）という名称で呼称し、日数の少ない順から多い順へと並べて、記述するという傾向がみられる。この枠組みにおいては、例えば２夜祭（Dvirātra）も１年サットラも、関連のない別々の異なるサットラとして列挙されているものとして理解される。この記述の枠組みは、おそらくシュラウタ・スートラにおけるサットラ章の記述の枠組みの下敷きになったのではないか

と推測される。

第４章（「4 KSの記述とTSの記述の対応」）では、KSのサットラ章とTSのサットラ章の記述内容の対応を示し、その比較から推測されることをまとめている。特に顕著に異なる点は、９日間の儀礼、２１日間の儀礼はKSにあるが、TSにはないこと、KSにおける人間犠牲を示唆する要素は、TSにおいては否定されるか、その要素ごと存在しないかということである。一方、１年サットラの記述に関しては一致する箇所も多く、特にマハーヴラタ祭（Mahāvrata）は、記述順序の相違や内容に関する部分的な相違が認められるものの、ほぼ一致している。第５章（「5 春分祭と夏至祭に関する記述」）では、夏至と春分の儀礼に関する記述と思われるMS、KS、TS、TBの平行箇所を比較、考察する。この考察の結果、９日間の儀礼は春分に行われるものであり、２１日間の儀礼は夏至に行われるものであるという結論に至っている。

第6章の結論では、本論の４つの章から推測できるサットラの原型とその発展過程をまとめている。まず最も重要な発見は、KSのサットラ章とTSのサットラ章の記述の枠組みには大きな隔たりがあるということである。すなわち、KSのサットラ章は全体の記述を１年サットラのみに捧げているが、TSのサットラ章は１年サットラを個別の様々なサットラの最も長いヴァージョンとして述べているかのようである。ここから推測できるのは、KSのサットラ章がおそらくはサットラの原型に近いのではないかということである。というのも、KSにおける人間犠牲を示唆する記述はTSでは非難されるか、その記述ごと存在しないものとされているからである。また、１年サットラの１年周期性を顕著に示すと思われる春分祭（９日祭）と夏至祭（２１日祭）についても、TSでは記述がない代わりに、おそらくはMSのソーマ章及びKSのサットラ章とソーマ章からの記述を基にTBにおいてその記述が補完されている。この分析に続いて、なぜこのような変革をTSが行ったのかについて、論者は暫定的な意見を述べる。おそらくは、TSを編纂した集団がKSを編纂した集団よりはインド・アーリア民族の文明の中心地にいたことによって、祭式内容の定型化や、人間犠牲などの野蛮で残虐な要素を示唆するものを排除しなければならないという必要に駆られていた可能性がある。あるいは、TSの編纂の時期はKSより後であるので、その時代の変化を反映しているということも考えられる。最後に、サットラとソーマ祭の関係に関する論者の結論が述べられる。サットラはソーマ祭の一種であると一般的には、シュラウタ祭式に基づいて語られる。しかし、KSでは、ソーマ祭（グラハ汲み）が行われるのは、９日間の儀礼（春分祭）とマハーヴラタ祭（１年サットラの締めくくりの祭り）のみである。サットラ祭のそれ以外の日は基本的にストーマなどの詠唱のことが述べられているだけである。ここから推測されるのは、当初、つまりサットラの原型を映し出すKSのサットラ章では、１年中行われていると考えられるのはストーマの詠唱であり、グラハ汲みは特別な日にのみ行われた。そして、グラハ汲みが行われるマハーヴラタを含む１

２日祭（Dvādaśāha）がサットラの代表的なものとしてみなされるようになったと考えられる。その１２日祭がソーマ祭に分類されるので、サットラ全体がソーマ祭に分類されるようになったのであろう。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、古代インドの祭式文献群ヴェーダに含まれる、『カータカ・サンヒター』（KS）および『タイッティリーヤ・サンヒター』(TS)の中の、サットラと呼ばれる儀礼についての章を研究したものである。KSとTSは、ヴェーダ祭式の儀礼行為の記述と、その哲学的・神話的解釈を目的とする文献であり、祭式、哲学、神話を述べる散文の文献としては最古のものである。紀元前９～８世紀頃の成立と考えられており、KSがTSより古いと考えられているが、成立の状況を明らかにする資料が一切存在しないため、成立年代や文献間の関係は常に議論となる。現代語訳については、TSはA.B.Keithによる1914年に出版された英訳のみ、KSには未だ全訳が存在しない。サットラを扱う章については、H.Falkの研究書などで部分訳がなされているが、全体を翻訳して詳しく考察した研究は存在しない。研究が十分になされていない理由は、これらの文献を理解することが極めて難しいからで、その難しさは、サンスクリット語の中でも古い特徴を残すヴェーダの言語の特徴と、複雑な儀礼行為の全体ではなく一部分だけが記述されるという記述スタイルにある。既存の辞書では解決しない未解決語については、語源、語形を言語学的に分析する必要があり、その上で暫定的に翻訳を作っても、そもそも何について述べられているのかも、解釈するのが極めて困難である。このような文献について、サットラ章という一部分ではあるものの、章全体を訳し、言語学的および内容解釈についての注釈を付し、さらに儀礼の成立と発展を論じるということは、この困難に正面から取り組むということであり、本論文はその課題を高い水準で達成した。

本論文がヴェーダ学、あるいはインド学全体に寄与するものである大きな理由は、本論文がサットラという謎に包まれた儀礼について、ヴェーダ期における実態を相当な程度に解明したことにある。論文中の「研究史」で詳しく述べられているが、サットラは、ヴェーダ文化の中でいわば異文化的な位置づけの人々が保持していた文化、儀礼であることが、古くから議論されてきた。ヴェーダ文化は、最古の文献リグ・ヴェーダの作者、伝承者と彼らの家系に連なる人々を中心に発展したと考えられているが、サットラを行っていたグループはリグ・ヴェーダの人々よりも以前に、インドにやってきて根を下ろした人々と考えられている。この人々の儀礼、思想は、ヴェーダ祭式文化の発展に大きな影響を及ぼしたと考えられるが、ヴェーダ文献を編集した正統派の人々は、その異端的起源の儀礼、思想をそのまま記述するのではなく、正統派の文脈に組み入れようとした。このことが、サットラの起源やヴェーダ期における実態、発展過程を、非常に見えにくくしている。そのような状況で、本論文においてサットラの実体と発展過程が相当な程度に解明されたことで、ヴェーダ祭式史、ひいてはインド文化史全体に、多くの新しい知見が加えられた。

本論文の本論は、KSのサットラ章の構成と特徴、TSのサットラ章の構成と特徴、両文献の記述の比較、春分祭と夏至祭に関する記述、を主な内容とし、その後、結論と

して、行われた考察の中で特に重要な事柄をまとめている。これらの議論は、付論で原文と訳注にまとめられた、原文校訂、翻訳および注釈をもとにしたものである。本論には、特に意義があると考えられる考察が五つある。一つ目は、サットラ記述の枠組みについてである。サットラは古くは１年サイクルの修行的集団生活であったという指摘は古くからなされてきたが、一方で古典的祭式分類においては１２日およびそれより長いソーマ祭（興奮性の植物の搾り汁を用いた祭式）として分類されている。本論文でKSおよびTSのサットラ章全体の構成を考察し比較した結果、KSにおいては１年間を通じて行われる儀礼が記述されており、１年の最後の締めくくりが１２日祭であった一方で、TSにおいては、様々な日数の様々な儀礼が記述されており、１年間のサットラはその中で一番長いもの、という位置づけであった。KSとTSの記述ではその枠組みに大きな違いがあり、TSが儀礼の大きな改革をしていたことがわかった。二つ目は、今述べた１２日祭の古い姿であり、KSの考察により１年の最後の締めくくりの儀礼であることが明らかになった。他方、ソーマ祭の一種とする後代の分類は、TSの提示するような枠組みにおける分類である。三つ目は、エーカーダシニー（１１頭の動物犠牲）の実態であり、１２日祭において１日１頭ずつ犠牲獣を屠ること、１２日目の最後の犠牲獣として人間犠牲が象徴的にではあれ、行われることがKSにおいて述べられていた。TSではこの儀礼は記述されておらず、KSが古い儀礼の形を残しており、TSによる改革でそれが廃止されたと考えられる。四つ目は、春分祭、夏至祭がサットラの中で行われていたことを明らかにしたことである。春分祭、夏至祭に相当する祭式は、KS、TSの時代の祭式文献や、後の時代の祭式解釈書においても見られないため、これらの祭式についてヴェーダ期の記述が報告されたのは、初めてであろう。五つ目として、１年間のサットラにおいて、ソーマを用いた儀礼が記述されるのは、春分祭および１２日祭のみであり、開催期間中ソーマを飲み続けていたのではないという指摘は、これまでなされてこなかった重要な指摘である。サットラはソーマ祭に分類されるため、多くの研究者は、サットラとソーマを強く結びつけて考えてきたが、毎日ソーマを飲んでいたわけではないという指摘は、これまで多くの研究者が描いていたサットラの像を一変させるものである。

一方いくつか問題点もある。論者が述べる「サットラの起源」「サットラの原型」という概念についてはあいまいさが残っており、そのため今回扱った原典資料から解明されたことと未解明の部分の区別が時にあいまいになっていることが審査委員から指摘された。この点は、たとえば「インド・イラン共通時代」「アーリア人がインドに侵入した時代」「KSやTSがサットラ章を記述した時代」などの時代区分を明確にした上で、何を「起源」と呼び、何が何の「原型」であるのかを論じれば、サットラおよびそれを取り巻く社会の変化と発展についての議論がさらに明解になるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和６年２月９日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。